2020.1.2

博物館 Dictionary No.218

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館2F−4（近世絵画）に展示されている作品について勉強してみよう。

京都御所の障壁画―紫宸殿

みなさんもよくご存じのとおり、京都御所は約150年前まで天皇が住んでいた場所です。明治2年（1869）に天皇が京都から東京に移ると、かつて徳川将軍の居城だった江戸城が天皇の新しい住居となり、京都御所は天皇の住まいではなくなりました。なお、天皇の住居は、宮・内裏・禁裏・禁中・御所など歴史上さまざまな名称で呼ばれてきました。京都御所の周囲に広がる京都御苑は、かつて公家の邸宅が建ち並んでいた区域が明治時代以降に公園として整備されたものです。

図1　紫宸殿外観

8世紀末の平安遷都にともない平安京に建てられた内裏は、つねに京都という都市とともに歴史を歩んできた、京都を象徴する歴史的シンボルのひとつと言ってもよいでしょう。京都の街並みを描く「洛中洛外図屏風」はたくさんの数が残っていますが、それらにはほぼ例外なく内裏が描かれています。

では、現在私たちが目にすることのできる京都御所は、今から1200年前につくられた建物なのでしょうか。残念ながらそうではありません。その理由は、内裏が歴史上いくたびもの火災に見舞われてきたからです。奈良法隆寺にはもっと古い木造建築が残っていますので、火災や戦災にさえ遭わなければ、平安時代の内裏を見ることも不可能な夢物語ではなかったかもしれません。

もともと、平安京に最初につくられた内裏は、現在の京都御所よりも西に位置しており、上京区下立売通浄福寺付近（現在の二条城北小学校北西付近）からは承明門（内裏の門のひとつ）の跡が発掘されています。しかし、内裏は創建以来10回を超える火災に遭い、そのたびに天皇は京都の中にある臣下の邸宅などへと移り住むことを余儀なくされました（この仮の天皇の住まいを里内裏と呼びました）。そして、14世紀前半に天皇の仮の住まいとなった場所が、そのまま現在の京都御所へと引き継がれることになります。現在の位置に定まったあとも内裏は何度も建て替えられており、いまの京都御所の建物はおもに幕末の安政2年（1855）に建てられたものです。

その京都御所のなかでもっとも格式が高く、中心となる殿舎が紫宸殿（図1）です。紫宸殿では、はじめは日常の政務などが行われていましたが、やがて即位などの重要な儀式も行われるようになりました。この紫宸殿に飾られる9面の障子を、賢聖障子といいます。賢聖障子は高御座（天皇の玉座）の後方に位置し、中央の1面には獅子狛犬と瑞獣（おめでたい動物）である負文亀が、残る8面には中国古代のすぐれた人物が各面4人、計32人描かれています。各人の上部には色紙が貼られ、その人物の名前や功績などが記されるという形式がほぼ定まっており、平安時代にさかのぼる長い歴史があります。

現在の京都御所内部を飾る障壁画は、そのほとんどが安政度の内裏造営にともない新たに描かれたものですが、賢聖障子は火災による焼失を免れたため、寛政2年（1790）に内裏が再建された当時、幕府に仕えていた画家住吉広行（1755～1811）が描いたものが残っています（図2）。ただし、この賢聖障子が完成したのは寛政4年（1792）、つまり建物の完成から約2年も遅れてのことでした。これは、描かれている人物の冠や服装に間違いがないか、その人物にふさわしいものであるかなどについて、幕府に仕えていた柴野栗山をはじめとする学者たちが時間をかけて調べ、何度も下絵を修正したためです。内裏の重要な建物を飾る襖絵だからこそ、慎重に作業を進める必要があったのでした。

そのようにして制作された大切な絵は幕末の火災後に修理と一部の補作が行われ、現在に伝えられました。絵を描くということに並外れた情熱を注いだ人々の想い、そして絵を守り伝えようとした人々の想いは目には見えないものですが、この賢聖障子にはそれらがたしかに込められているのです。

（美術室　福士 雄也）

図2　賢聖障子（9面のうち）　住吉広行筆　江戸時代　寛政4年（1792）　宮内庁京都事務所蔵

（右から）　東一間　馬周・房玄齢・杜如晦・魏徴　　東二間　諸葛亮・蘧伯玉（蘧瑗）・張良・第五倫
東三間　管仲・鄧禹・子産（公孫僑）・蕭何　　東四間　伊尹・傅説・太公望・仲山甫

（左から）　西一間　李勣・虞世南・杜預・張華　　西二間　羊祜・揚雄・陳寔・班固
西三間　桓栄・鄭玄・蘇武・倪寛　　西四間　董仲舒・文翁・賈誼・叔孫通

印刷・富士印刷社